

第 85 回湘南科学史懇話会

## 閉じて開く「なみえ復興大学」

～3・11 から 7 年目の故郷・浪江復興の私的反省と希望～

2017 年 8 月 6 日

茅ヶ崎市勤労市民会館

なみえ復興大学準備室長

原田洋二

### 【目次】

1. 専門家と素人・・・・・・・・・・ 2  
この問題との出会い  
専門家・有識者への不信感  
新専門家の条件  
共感する専門家との出会い  
復興メディエーター制度  
『復興ストレス 失われゆく被災の言葉』と著者・伊藤浩志
2. 詩人・吉増剛造によって救われたもの・・・・・・・・・・ 5  
プロフィール  
5つの救い  
「みんなで作る浪江詩人の家」構想
3. 大木淳夫作詞『土の歌』合唱団創設・・・・・・・・・・ 6  
大木淳夫と浪江町  
「土の歌」「大地讃頌」  
「土の歌」を歌う合唱団（仮称）設立準備
4. 浪江町復興 DNA に学ぶ地域文化の再評価・・・・・・・・・・ 8  
復興に必要なもの  
東北の自由民権運動牽引した苅宿仲衛  
単独の町で最多数を送った浪江のブラジル移民  
運命的な出会いの書、佐藤俊一著『村の野仏たち』  
進歩的浪江人の源流、錦織晩香  
浪江町民は「復興 DNA」を受け継いでいる  
閉じて開くとは

## 1. 専門家と素人

## この問題との出会い

日本学術会議などのシンポジウム  
浪江町復興計画策定委員会

## 専門家・有識者への不信感

- ・ 科学者が抱える問題は科学者間では解決できない？ (2015-09)
- ・ 科学からの国民的合意形成の可能性 (2015-09)
- ・ 加害者責任を問う専門家の社会的責任とは  
～立場を分ける3つのイベントに参加して～ (2015-09)
- ・ 科学者は市民を考えていない？ (2016-09)

現時点での復興の障害となっている行政・専門家主導の復興計画ではなく、浪江町民が復興の主体として関わることです。しかし、復興は専門家なくしてはできません。専門家は私たちの復興のために、その専門性をいかに発揮していただきたいのです。そのために私たちが理想とする専門家としての資質を3つ提示します。これは現在の専門家への批判ではありません。私たちの責任を全うするために、専門家の協力が必要なのです。

## 新専門家の条件

1. 素人と言語を共有する
2. 素人と思考を共有する
3. 謙虚さをもつ

専門家という名称は、これまで明確ではありませんでした。3.11がこれを明らかにしました。専門家は個々の専門分野の研究成果を伝えるだけでは社会との責任は果たしたことはありませんのです。3.11以降、科学者に対する信頼は失墜したという報告がありました。社会における専門家とはどうあらねばならないのか。もちろん、すでに気づいている専門家もいらっしゃいます。大いなる救いです。専門家は本来の専門的な研究にまい進されつつ、謙虚さを兼備して初めて、専門家は私たちの信頼を得ることができると思います。

## 共感する専門家との出会い

### 去年の某シンポジウム後、往復メールをした専門家のメール

まず、有識者や専門家といったラベルを誰が貼るのかという点が問題があります。

1 ミリシーベルトが安全か危険かといった議論の立て方自体、リスク分析・マネジメントの専門家であれば決してしません。政府や自治体、メディアはどういう調査や基準により有識者や専門家として招へいしているのだろうかと思うこともあります。

浪江町の委員会の構成は浪江町で決める問題であり、そこに問題があるとする自治体に問題があるということなのかもしれません。

また、専門性と専門家は異なります。専門家も別の局面では一般市民ですし、一般市民も往々にして何がしかの専門性を持っているものと思います。

要は問題は、一般市民と専門家がまるで別世界の人間でありかのように区別されていること、結果として他責的な言葉遣いに終始し、問題を自分のこととして捉えられていないこと、専門性を評価し、活用する仕組みがないことの3点ではないかと思います。

委員会形式の良くないところは、外から「専門家」を借りてくることで、地域としての主体性がある意味抑圧されることや、地域で専門性を持った個人を育てる仕組みが作られにくくなることにあるのではないかと感じています。

私の学術会議の資料の中で、解決策は、「専門性」と「主体性」を備えた個人である旨、書かせて頂きましたが、そのような個人がたまたま産まれるのを待つのではなく、何かいい仕組みを作れないかと考えています。

講演後、顔見知りの研究者から、そのような trans-disciplinary な専門家や、それを支える組織や制度が必要という主張をあなたのような trans-discipline の専門家が主張することは、原子力の専門家が原子力が必要だと論陣を張っているのと全く同じ構図であり、講演内容自体が矛盾しているのではないかと指摘を受けました。それもまた一理あるわけですが、そのような社会に立脚した専門家の必要性は、個々の学術領域の正当性や必要性を主張しているわけではなく、科学者に共通する行動規範であるべきだと思います。(略)

## 復興メディエーター制度の設立

### 専門家と私たちの間に復興メディエーターというポジションを提案

上記の新専門家の条件を満たせない専門家と私たちの間を第三者として介在し、それぞれの職分を最大限に活かして復興に貢献する双方にとってかなり有効な仕事です。これを制度化できれば、今後の災害からの復興はこの度の復興より短期的に、より効果的なものとなるはずです。そのためには、私たちと専門家、行政を含めた横断的な協力がなければ達成できません。しかし、これこそが復興体制の原点です。

また私たちも、「素人のプロ」にならなければなりません。素人のプロとしての条件は、浪江町のあらゆるアイデンティティを考え、学ぶという姿勢をもつことです。ただ、学習することは大事ですが、「にわか専門家化」することは問題解決を遠ざけることとなり、何より専門家の尊厳を傷つけることとなります。**にわか専門家は本来の専門家間の問題を素人間の「代理戦争」へと移行するだけで**、取り返しのつかない住民間の分断を残すだけです。この最悪の不幸を回避するためにも、双方の尊厳を認めつつ協調する関係をめざします。こうして、専門家・行政と私たちの三双方が果たすべき責任を復興に向けて**インテグレート（統合）**するシステムが完成された時、これこそが、科学文明に追従した現代に対して警鐘を鳴らす資格を与えられた浪江町を含めた被災地が、日本のみならず世界に発信できる唯一の復興の仕方であり、理念となり得ます。

## 『復興ストレス 失われゆく被災の言葉』と著者・伊藤浩志

### プロフィール

1961年、静岡県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。専門は脳神経科学。ストレス研究で博士号を取得。現在、フリーランスの科学ライター。国際基督教大学でゲスト講師として講義をするなど、福島県を中心に各地で放射線の健康リスクをテーマに講演活動を行っている。元時事通信社記者。雲仙普賢岳の大火砕流や阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、脳死臓器移植、遺伝子組み換え食品など、科学・先端医療が絡む社会問題を担当した。福島在住。

### 脳科学の立場から語られる驚きのこと

6月に偶然見つけた本書は、この3・11由来のあらゆる問題と解決に向けて書かれた本と出会った中で、最も僕の感覚と視点に共通したものを感じた。以下は、全て著者の専門領域の脳科学の立場から語られている。

- ・正確さを追求するより、大雑把に素早く反応した方が生存に有利、それが経験に裏打ちされた生命の生き残り戦略だ。(P73)
- ・不確実性の高い状況下では情動に基づく判断は理性的判断に比べ、相対的に高い合理性を発揮する可能性が高い。(P74)
- ・条件が同じなら、直観のほうが熟慮より正解率が高くなることは、実験で確かめられている(P78)
- ・原発事故由来の被ばくを医療被曝と比較する科学者は、健康リスクを被ばく量に還元することで客観化し、自分を政治的に中立な立場に置いているようでいて、質の違いを無視し、社会の病から目をそらしている。(P129)
- ・情報不振の原因は、統一した正しい科学的事実が示されていないからではない。原因は、多くの人たちが「安全は科学的に決めることができる」と誤解していること。(P148)
- ・専門家と呼ばれる人の多くは客観的立場にこだわるためか、自分の価値観を語ろうとしない。リスクの物差しが異なっていることに気づかない。あるいは気づこうとしないから、議論がかみ合わず、不毛な科学論争が続くことになる。(P149)
- ・社会学者のベックは、「あまりに専門化が進みすぎたため、専門と専門の隙間から、ざるの目を通り抜けるように危険が落ちてゆく。(P150)
- ・科学者のリスク認知にも、バイアスがかかっていることが知られている。…専門家は、関心が技術的な側面に偏りがちで、利便性のためにはある程度のリスクはやむを得ないと考えている。(P152)
- ・最も厄介なバイアスは確証バイアスだ。…自分に都合のいい情報は受け入れやすく、そうでない情報は受け入れにくい傾向…。人々は論争のために、自分の主張に確証を与える証拠を探そうとし、自分の主張に反する意見や証拠を無視する。(P152)
- ・これらの実験結果は、良くも悪くも意思決定の主役は無意識のうちに起こる情動(バイ

アス)で、理性的判断は後付けにならざるをえないことを示している。(P165)

・情動はリスクをいち早く察知し、我々にその存在を教えてくれる大切な警報装置なのだ。  
(P167)

・対話を促進し、信頼関係を築くためには、必要以上に中立性にとらわれることなく、科学者も自らの価値観を表明する必要がある。(P174)

## 2. 詩人・吉増剛造によって救われたもの

### プロフィール

(よします ごうぞう) 1939年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒業。大学在学中から旺盛な詩作活動を展開、24歳のとき詩集『出発』(新芸術社)でデビュー。以後先鋭的な現代詩人として今日に至るまで国内外で活躍、高い評価を受ける。朗読パフォーマンスの先駆者であり、現代美術や音楽とのコラボレーション、写真などの活動も意欲的に展開。2006年より『gozo Ciné』と呼ばれる映像作品を発表、『キセキ gozo Ciné』(DVD付 オシリス)として刊行。主な詩集に『黄金詩篇』(思潮社 1970 高見順賞)、『熱風 a thousand steps』(中央公論社 1979 歷程賞)、『オシリス、石ノ神』(思潮社 1984 現代詩花椿賞)、『螺旋歌』(河出書房新社 1990 詩歌文学館賞)、キセキ gozo Ciné』(オシリス 2009)、『「雪の島」あるいは「エミリーの幽霊」』(集英社 1998 芸術選奨文部大臣賞)、『表紙 omote-gami』(2008 毎日芸術賞)、『我が私的自伝 素手で焔をつかみとれ』(講談社現代新書 2016)、『GOZO ノート』(慶応義塾大学出版会 2016)、『心に刺青をするように』(藤原書店 2016)、『怪物君』(みすず書房 2016)、『根源乃手／根源乃(亡露ノ)手、……』(響文社 2016)、『火ノ刺繍 2008-2016』(響文社 2017年8月出版予定)など、その他、評論やエッセイ、写真集など著作多数。文化功労者、2015年、日本芸術院・恩賜賞、日本芸術院会員。三田文学会理事長。2016年6月から8月に東京国立近代美術館で、50年に及ぶ創作活動を紹介する、「声ノマ 全身詩人、吉増剛造」展が開催された。(『根源乃手／根源乃(亡露ノ)手、……』(響文社)よりほぼ引用)

### 5つの救い

1. 2011.3・11 直後に飲んだ無言の酒
2. 2013.3・11 浪江行。請戸で創作。その後、「包む(くるむ)」発想が復興のカギ
3. 2015 脳腫瘍手術での留守電の声
4. 2016 国立近代美術館個展最終日、最終時間に訪れたもの
5. 2016 「みなさんで作る詩人の家」構想  
テンポラリー・スペース、中森敏夫との出会い

### 「みんなで作る浪江詩人の家」構想

### 3. 大木淳夫作詞『土の歌』合唱団創設

#### 大木淳夫と浪江町

明治 28 年生まれの大木淳夫は北原白秋の門下の詩人として、白秋の後継として日本の抒情詩の正統派詩人と言われています。その大木淳夫の詩碑が浪江町にあります。その場所は、現在も帰宅困難区域となっている県立高瀬川溪谷公園の神鳴地区です。それを紹介した『ふるさとの文学散歩 浪江町の文学碑』（松本博之著 風草舎 平成 17 年）の巻頭にあるので引用します。

「…浪江町の高瀬川溪谷、神鳴（かなり）の道のわきに、大きな自然石の詩碑が建っている。相馬焼の里大堀から約三キロ、高瀬川を左に見ながら歩いていくと、東北電力の神鳴ダムの跡地に出る。そばのトンネルを抜けて二十メートルほど行くと道の左側に建っているのが、大木淳夫の「高瀬川哀吟」の詩碑である。…」

秋の浪江町では最も有名な行楽スポットです。瀬を早む高瀬川溪谷の切り立った石が聳え、錦秋の紅葉に染まるなか、杯を交わす人々で賑わいます。なぜ、大木淳夫の詩碑が浪江にあるのか。大木は浪江に一時期住んでいたのです。

「…戦争が激しくなった十九年の十二月、彼（大木）は急ぎの著作を完成させるため東京をたつて、常磐線の浪江の駅に降りたった。阿武隈山系に沿った漁村のとある旅宿に滞留することになったが、そこではしなくも病に倒れ、前後四カ月ちかく療養生活を送らなければならなかった。そして翌年の三月には更に大堀村（現在は浪江町に合併されている）へ移り、ここで敗戦を迎えるころになるのだが。この間の作品をまとめたものが『山 の消息（昭和二十一年九月・健文社発行）という詩集になっている。…』（また、前出の『ふるさとの文学散歩 浪江町の文学碑』にもこう記されている。「…ジャワの戦地から帰還して、東京渋谷のアパートを仕事場としていたころ、たまたま隣人として知り合った人の故郷が福島県大堀村であった。そんなふとした機縁から…、詩人は急ぎの著作もあったので、駅前の白木屋旅館に滞在して仕事を続けた。そのころ、東京からの学童疎開の子ども達も同宿しており、東京ではすでに米軍機による空襲が始まっていた。東北の小さな町浪江にも、警戒警報のサイレンが鳴り響くようになっていた。…」

この後に登り窯の煙突が緑深い大堀焼の里の中に点在する描写などが出てきますが、駅前の白木屋旅館にしても、この一文を読んで、大木が浪江に滞在したことは事実です。

その後、大木淳夫作詞の 7 楽章からなるカンタータ「土の歌」の最終楽章「大地讃頌」は、NHK 全国学校音楽コンクールの高校課題曲になるほど、全国的に合唱では人気の曲となっています。この歌詞（詩）を読んでも、まさに今の浪江町、さらには日本の現況を予言するような文明批評性、予言性の高さに驚きます。

・大木の次女、宮田毬栄（1936～）は、『忘れられた詩人の伝記 父・大木淳夫の軌跡』（中

央公論新社、2016) で読売文学賞評論・伝記賞。

### 「土の歌」

第1 楽章「農夫と土」—自然の恵みの神秘、土への感謝が描かれている。

第2 楽章「祖国の土」—人は皆土に生まれ、土に還っていくという意味の詩。

第3 楽章「死の灰」—原爆について取り上げられ、人間と科学の汚さが描かれている。

第4 楽章「もぐらもち」—第3 楽章と同じく原爆が扱われており、モグラに例えて人間を皮肉っている。

第5 楽章「天地の怒り」—天災と人間悪について描かれている。

第6 楽章「地上の祈り」—大地への想いと反戦の祈りが書かれている。

第7 楽章「大地讃頌」—本作品を締めくくる大地への限りない讃歌

### 「大地讃頌」

母なる大地の懐に 我ら人の子の喜びはある

大地を愛せよ 大地に生きる

人の子ら 人の子その立つ土に感謝せよ

(人の子ら 人の子ら 土に 感謝せよ)

平和な大地を 静かな大地を

大地を誉めよ 頌(たた)えよ 土を

恩寵の豊かな 豊かな 大地 大地 大地

(我ら人の子の 我ら人の子の 大地を誉めよ)

頌えよ 頌えよ 土を

(誉めよ 頌えよ)

母なる大地を 母なる大地を

頌えよ 誉めよ 頌えよ 土を

母なる大地を ああ 頌えよ大地を ああ

### 「土の歌」を歌う合唱団(仮称)設立準備

この先人の時代感覚を受け継ぎ、大木惇夫のこの曲を浪江町から全国に発信することを、被災当事者としての使命と責任として、「土の歌を歌う合唱団」(仮称)を創立します。現在、小田原市・多摩市、「むぎ笛」(枚方市)・「福島しあわせ運べるように合唱団」(二本松市)・浪江混声合唱団(交渉中)からは、全面的な協力の確約を得た。

今後は組織化と資金が課題。

## 4. 浪江町復興 DNA に学ぶ地域文化の再評価

## 復興に必要なもの

現在の復興計画では、被災者が主体的に復興に取り込めるモチベーションがない。

### 数値化できる項目

帰りたい人が〇〇%、防潮堤の高さ〇〇mが〇〇%、これらがパブリックコメントと称して、住民の声を反映するという体を取って正当性を強調しています。これも認めるとしましょう。

### 数値化できない項目

祭りが生きがいなど様々なメンタル的な要素は、文化を形成する重要なものでありながら数値化しにくいいためか、復興計画には入りません。

各自治体の復興計画を見ると、極端に言えば表紙の「〇〇町復興計画」の町名を差し換えてもさほど変わりはないのではと思うくらい似たような内容になっています。そして、見事に復興内容に「文化」の項目はどこも見当たりません。あったとしても、申し訳程度です。

でも一方で、被災している人々は一様に自分の故郷の素晴らしさを、まるで他町と比較するように自分の生まれ育った町を誇りとしています。当然です。気候・風土なども含めて、その地の歴史に育まれた文化を共有していたからこそ、故郷なのです。であれば、この文化の復興こそが、復興計画の中心とは言わずとも、復興計画を現実のものとするために大事な推進力となるのではないのでしょうか。

## 東北の自由民権運動牽引した苜宿仲衛

### プロフィール

1854年、苜宿村（現在の浪江町苜宿）の代々神官を務める家柄に生まれる。宮城師範学校に学び卒業するとしばらく小学校の先生を指導する先生として活躍。1880年、教育の世界から政治の世界に入り、民主主義や自由を求める自由民権運動に加わり全国各地に足を伸ばして活動。この運動は、当時の政府に反対する運動として弾圧を受け、福島事件、加波事件、大阪事件などで警察に逮捕されたが、そのいずれの場合も無罪放免になる。いつの場合も、放免されるとすぐに牢獄に入っている同志の家族を救うために熱心に活動。1886年に県会議員となり、1890年の第1回総選挙に立候補（落選）した時期を除いて、1898年まで一貫して自由党の県会議員として自由と人権のために闘う。

3・11以前までは、僕も全く知りませんでした。でも、あの時から浪江に関することと聞いたら、とるものとりあえず、見たり聞いたり会ったり調べたりしているうちに、浪江という場がどういうところだったのかが、やたらと気になり始めました。でも、それは許可証がなければ町に入れない異常さが続くことで一層もどかしさを感じました。

そんな時に出会ったのが、明治時代に東北の自由民権運動を牽引した苜宿仲衛（1854～1907）です。



## 自由や自由や 我汝と死せん 菟宿仲衛

菟宿を調べていて、強烈な印象を受けた言葉です。これは、国に反旗を上げる自由民権運動家狩りで標的とされた菟宿が、自宅で子どもの目の前で逮捕された時に、押しかけた警官たちを玄関前に待たせて、その間に書いたものです（これは福島県立歴史資料館に所蔵されている）。なんと激烈な書でしょうか。菟宿は幕末の安政元（1854）年、菟宿村（現浪江町）の由緒ある神官の家に生まれました。当時、浪江町も含めた東北全般は、天明や天保の大飢饉などで死者が多く、菟宿では人口の三分の二が亡くなったと言われています。こうしたことは、次に上げるブラジル移民の数と無関係ではないようです。事実、この菟宿地区は、浪江でも移民数が多いところですが、こうした厳しい環境を肌身で感じていた菟宿が、自由や民主主義を、死を賭しても獲得しようとしたことは地区の農民、そして郷土への愛の強さと理解します。

菟宿は、地方自治を確立するために奔走し、板垣退助や河野広中たちと交流し、県会議員から国会への道を模索してきました。それは叶いませんでしたが、浪江町の浜街道、津島道路の開通、常磐線の敷設に尽力しました。

### 単独の町で最多数を送った浪江のブラジル移民

浪江町は日本一のブラジル移民送り出しの町

単独の町としてはブラジルへ最も多くの移住者を送り出している

#### 理由

菟宿が立ち上がった明治後期から昭和初期の農村恐慌時代がベースでした。そこに国策として「移住」計画が出てきて、人々は国内での生活の破局から逃れるために海外に新天地を求めましたが、また世界に雄飛して名を上げようとする人たちなど、様々な思惑で海を越えてブラジルなどの中南米はじめ、北米などをめざしました。しかし、国の援助は薄く、移住後の生活援助などを行わなかったため、「棄民政策」とも言われました。さらに、労働期間を明示した契約書を持たない渡航者は「自由移民」と呼ばれ、渡航にかかる一切の費用は自己負担していました。この事実を知った時、ふとこの度の東電原発事故によって生まれた「自主避難」という言葉が浮かびました。つまり、国の法解釈から漏れてしまった人たちへの対応は今も昔も変わらないなと思いました。ここでも、130年で日本はいったい何が変わったのかと思わざるを得ません。

このような環境の中で、ブラジルへの移民者は、1908(明治 41)年に 158 家族、781 人を乗せた「笠戸丸」が 57 日かけてサントス港に着いたのが最初で、そこに福島県人は 77 人で、なんとこの中に幾世橋村の只野儀助という人が乗船していたという記録がありました。これまで約 52 万人が移住して、うち約 5 万人が県人のようです。現地情報が今に比べて比

較にならないほど乏しいものだったのは、容易に想像できます。それでも彼らは海外に希望を求めて浪江をあとにしました。

今、浪江町からブラジルに移住した「浪江ブラジル移民史」を作る準備をしています。ところが、その資料が町や県にはありません。国策でありながら、こうしたデータを保管していないこと自体、自治体の責任放棄だと思いますが、他の資料を見ながら、移住した人の名簿を作り始めました。現在、延べ人数で約 200 名を超えました。

最初の移住者・只野さんが渡航以来、100 年以上経っています。ご本人はもちろんのこと、親戚の方や知人なども高齢化し、加えて全国に避難しているので、取材はかなり困難にです。しかし今やらなければ、浪江ブラジル移民史は歴史の藻くずとなって永劫に浮上しません。

## 運命的な出会いの書、佐藤俊一著『村の野仏たち』

### プロフィール

大正 4 年（1915 年）、浪江町生まれ。東京鉄道学校卒業。元朝鮮鉄道局に勤務、現地応召でシベリア抑留を経て帰国し、農業を継ぐ。昭和 52 年頃より摩崖仏、石仏の調査を始める。昭和 55 年、浪江の文芸誌「大地」が創刊され、郷土史、民話、伝説の連載を始める。昭和 56 年、『村の野仏たち』（北国詩の会）刊行し、翌年 5 月に第 5 回福島民報出版文化賞受賞。同月、東京都の消防士だった三男の学が、東京中野のマンション火災現場で 4 名を救助し殉職。昭和 63 年、『福島県の摩崖仏』執筆を急ぐが、出版を見ずに平成元年死去。享年 74 歳。平成 2 年、同書刊行。同年、佐藤俊一追悼集「白蓮」を同人仲間を出す。

## 文化復興の方向に決めさせた決定的な書

双葉郡内の石仏約 2000 体の調査  
自らを「元凶者」とする潔さ

## 進歩的浪江人の源流、錦織晩香

### プロフィール

晩香は文化 13（1816）年、中村城下に生まれ（今の相馬市）、幼にして英才の誉れ高く、江戸・昌平黌に学び、舎長に抜擢され、帰藩。帰藩後は幕末、維新前後の激動期に相馬藩の指導者として活躍。特に戊辰の戦には相馬藩を白虎隊の悲劇や、二本松少年隊の悲惨さから救う。

維新後は集議員議員として明治政府の基礎づくりに参画、明治 4 年（1871）、56 歳の時に居を幾世橋村（今の浪江町）に移し、山水翠明を吟じ、詩文に遊び書に親しむ。翌年「希賢舎」、いわゆる晩香塾を開き、当地の青少年教育に心を傾ける。その数三千人と伝えられ、その中から愛沢寧堅、半谷清寿、苅宿仲衛、今野美寿等、郷里の先駆者が排出され

る。明治 31 年 (1888)、病没し、居とした幾世橋・大聖寺に葬られる。(「錦織晩香遺墨集」より)

### 浪江町歴史博物館の設立準備

歴史博物館の設立は町の復興の象徴として、復興計画に反映したいと強く思います。これが、結局 3・11 の教訓になるはずです。それを、今後浪江町を訪れるであろう浪江町内外の人々に体感してもらう場として、発信力のある復興拠点となります。

この実現のプロセスで、喫緊の問題として浮上している文化財保護・レスキュー、震災遺構、文化のデータベース化等、浪江町の文化を資産とする発想は今後の復興計画の中心となるのでとても大事です

### 浪江町民は「復興 DNA」を受け継いでいる

苅宿仲衛にしてもブラジル移民にしても、彼らの置かれた状況は、原発事故によって先の見えない現在と、とても似たものを感じました。ある意味で命を賭した行動だったと思いますが、今よりはるかにグローバルで、はるかにコスモポリタンな考え方と行動をもった彼らを先人に持つ浪江町民は、あらゆる困難にも負けないで開拓してきた力を継承しているのです。それが、浪江町民に流れる「復興 DNA」です。

文化とは、先人の知恵を心に入れて、現状に対応する力ではないでしょうか。

浪江町、また多くの被災地にも、このような先人は必ずいるはずです。ですから今の復興は必ず成し遂げることができます。そのために、文化の継承は必須なのです。文化の継承のない復興計画は、形骸化＝数値化された復興でしかなく、それは震災以前のふるさとは戻りません。文化の継承を掲げて、今の、そして将来の被災地に向けて復興の仕方を伝える使命を果たしていきましょう。

### 「閉じて開く」とは

復興は、政府主導の復興計画の中にはありません。儒学者・青少年教育の錦織晩香であり、自由民権運動の苅宿仲衛であり、新天地を世界に求めたブラジル移民であり、郷土史研究での野仏の佐藤俊一たちの中にこそ、つまり浪江町の固有性として、浪江のことは浪江の人に聞けという当然である「閉じた発想」にこそ、柔軟な多様性をもった、「開かれた復興」が見えてくるのではないのでしょうか。他の町村も同様であり、その多様性を生む原動力が文化なのです。

被災して最も必要だったもの ⇒ アイデンティティ=文化の共有

閉じる＝外部由来の情報・手法の一時中断

地方創生総合戦略に則った復興計画を止める

土地自体が持つ文化資産の主体的な見直し

開く ＝住民が誇りを持たた故郷の復興に、再び主体的に関われる